

印象など何えればと思います。

観世…今回、能をさせていただくにあたりまして、存じ上げておりましたか、深く知る機会はなかったで、改めて深く知ってみようと思ひまして、調べました。また、稽古を重ねるうちに、やはり渋沢翁の生き方が、能に通ずるところがあると感じました。能は、鎮魂や、平和を願う芸能ですけど、渋沢翁も、経済を通じて、平和や、民を救う、そういう理念がやっぱり能楽の心に通ずるところがあると思ひました。

大前…なるほど。渋沢翁の教えとして「論語と算盤」が有名ですが、「私利私欲だけじゃダメなんだよ」「公っていうのも大事だよね」というところに相通ずるものがありますね。

■「父」と「先生」

大前…「青淵」の稽古は、監修でもあるお父様につけていただいていると伺っています。お父様との関わり方やお稽古について、お伺いしても宜しいでしょうか。

観世…まず父、観世清和のごですが、親父やお父さんという呼び方はしていません。高校生の時に指導を請う相手なので「先生」と呼び方に改めました。親子よりも、何時、如何なる時でも「師匠と弟子」という意味合いが強いです。でも、ちょっとお願いをしたい時だけ「お父さん」と言ってみたりしています。

一同…(笑)



観世…今回のお稽古についてですが、実は私自身が、新作能のシテをさせていただくのは初めてです。先生にお稽古は見えて頂いていますが、アドバースとか助言を期待しますが、できる限り自分でやってみなさいと言われます。「もし間違った方向に行ったりしたら、私が言いますから。だからなるべく自分でやってみなさい」と言われていますね。

大前…三郎太さんが継承されると、二十七代観世宗家という事になります。それぞれその時代のご宗家が、ご努力され発展させてきた。そういうことを背負われている訳ですね。

観世…そうですね。でも、皆さんから「般家庭とは違うんでしょ」と言われますが、逆に般家庭を見たことがないので、これが自分の中では普通と思っています。友人という時に父親から電話があつて「先生」と呼んだり、敬語で話していると、「誰からの電話？」と、「あ、あ、お父さんだよ」と言ったら、「そんな感じなの？」と変わっているねと言われたりします。

大前…それだからこそ、たまに「お父さん」として話をした時が貴重な思い出になりそうですね。

観世…先生自身も、父親(先代家元のこと)を「お父さん」と呼んだことはないと言っていました。

大前…先生の教え方が厳しくなったとか、何か接し方が変わったみたいなタイミングはありましたか？

観世…能にもいわゆる子役。子方と言いますが、幼少期、五歳から十歳、十歳、十二歳ぐらいまで。その時期は、まだ物心がつく前で、自分で考えることもできない。いわゆる、何かで釣るって言い方ですけど、鉛と鞭のような稽古だったです。そこから子方を卒業しまして、中学・高校のころの稽古は、師匠が言った話をオウム返しで謡う、そういう稽古が多かったです。大学位から、稽古は自分のためにするもの。それまでは、父親から「しなすうか」「しなすうよ」でした。そこからはもう自分で、稽古を見て欲しかったら、「お願いに來てください」と言われるようになります。「自分がちゃんとその演目を勉強して、見てもらえるようなレベルになったら來てください」というような稽古に変わりました。

大前…なるほど。それを見ながら先生は、手取り足取り教えてくださるものなのですか？

観世…いや、全く。見ていて違ふなと思ったら「それは違ふんじゃない」とか、その言葉だけです。具体的に何が違ふっていうのはおっしゃってくださいません。

大前…怖い教え方ですね。

観世…そうですね。怖いですけど「それでわかるだろう」といって、愛と言つか、そのよつなものを感じます。

大前…で、良かった時は褒めてくれたりするの？

観世…いや、良かった時は何も言われません。

大前…(笑)なるほど。

観世…でも、その部分が良かったとしても、今度は別の部分に違つてくる出て來るとか。稽古って生修行ですし、今、先生は十六歳になるのですが、未だに、毎日必ず二〜三時間は稽古場に籠つていらつやいます。能楽の世界では、ずっと稽古の道が続くので、完璧っていうのはないのです。逆に自分が稽古を受ける時に師匠から何も言われないと、ものすごく不安になります。「言うこともできないほどよほどひどい出来たのだからな」といふうちに。だから沈黙が「一番怖い」ですね。何か注意してもらつた方が「ここはダメだ」だけ、その他のところは良かったんだって逆に思える。

大前…でもそれは一般の社会の中でもありますね。

越野…ありますよね。自分の頭なり感覚で気づいていかないと、やっぱり身にはつかないですね。

観世…はい。

大前…ワキ方や囃子方とのタイミングの合わせ方とかライブだから現場でやらなきゃいけない。我々の仕事もそうですね。お客様ともそうですね、会社の中でもそうですね、やっぱり自分で呼吸をしなければ…。

■能との向き合い方

大前…三郎太さんは、祖父である観世左近元正先代宗家の三十三回忌という節目の年である二〇二二年の六月に、初めて「翁」に挑まれ、伝統のある格式の高い曲目を演じられました。こういう素晴らしいご経験を積み重ねておられますが、この辺りについて、お伺い出来ますか。

観世…ありがたいことに、父が観世流の家元でありますので、普通の年齢ならば勤める事が許されていない大曲や大役を経験させて頂きました。それも全部、先生、父親のおかげです。海外公演を一緒に連れて行くって欲しいという思いを持っていたら年齢のうちに全部の演目をやって欲しいという思いを持っていたらやるようになります。それは先生が、先代も先々代も早くに亡くなっていることから、大変な苦勞をされた事にあります。自分が教えられるうちに「あなたには不相応であつても、やれなくてもいいから、やるだけやってみなさい」ということで、いろいろな演目をさせていただいておられます。その中でも特に「翁」という曲は、本来は観世大夫、いわゆる家元しか勤める事ができない曲です。その「翁」の中に千歳という役があつて、翁大夫が舞台で儀式的に舞をする前に露払いの舞をするのが千歳の役目です。これは大体、若い人…って言うても、四十代、五十代の方も勤めるのですが…私も父の千歳を二十